

ユダヤは「律法」で滅びキリスト者は「律法」破棄で勝利した ——閉塞の支配知識階級と無学者の突破——

寺 内 孝

はじめに

欧米思想の源流をたどればヘレニズムとヘブライズムに行きつく。ヘレニズムは大河の観があるが、ヘブライズムに比べれば水路。ヘブライズムはそれほど巨大だ。欧米人の血肉となり、精神の隅々に浸透している。ゆえに、この知識なくして欧米の言語、文化、社会の理解は困難。本稿はすでに拙著『神の成長』（あぼろん社、2002）で展開したが、ここではその一部を取り上げ、より簡明、補完的に記述することによって拙論への理解を得ようとするものである。

要諦をいえば、初めにユダヤ教があり、これを大改革してキリスト教が誕生した。改革に先鞭をつけたのはイエスで、かれの死後、弟子ペテロらが遺志を継承、深化させ、改革を次の3点に昇華させた、1、「律法」の空文化、2、「主ヤハウエ」の民族神から世界神への解放、3、ヤハウエ信仰のイエス・キリスト信仰への転化。実にモーセ以来1300年の因習を打破する大宗教改革といえる。

改革を断行した人たちはユダヤの支配知識階級ではなく、「無学な普通の人たち」。前者はユダヤの滅亡をもたらしたが、後者はエルサレムで「分派」を開き、各地へ拡散、2度のユダヤ戦争に加わることなく、敵国ローマへ侵入、熾烈な迫害にさらされながらも国教の地位を勝ちとる。端

的にいえば、ユダヤ人は、西暦 135 年の国家の物理的壊滅を 257 年後に精神的征服で報いたということ。壊滅か征服かの分岐点は「律法」固執か廃棄かにあった。

イスラエル

1 天地万物創造の「神」

旧約聖書によると、ヘブライ人の「神」は「天地万物」創造の「全能の神」(the almighty God) である (創 1-2 章、17・1；出 6・3)。その「主なる神」(the Lord God) (創 2・4) が、塵^{ちり}からアダムを、アダムのあばら骨からエバをつくり、その子孫がイスラエル民族の族長アブラハムという (創 11・10-26)。紀元前 2000 年頃の人だ。

アブラハムの孫にヤコブがあり、あるときヤコブに「神」(God) が顕現し「イスラエル」の名を与える (創 32・29、35・9-10)。ヤコブは「乳と蜜の流れる土地」カナン (現パレスチナ) の住人であったが大飢饉に襲われ、11 人の子供と仲間 70 人の集団をつくり、エジプトへ下向する。エジプトにはヤコブ (イスラエル) の第 11 子ヨセフがいた。ヨセフは子ども時代、異母兄たちにねたまれ、エジプトへ奴隷として売られたが聡明だったので「司政者」に出世していた。

一行 70 人がまだ旅中にあるとき、「神」がヤコブ (イスラエル) に現れ、将来カナンへ「連れ戻す」と告げる (創 46・3-4)。紀元前 1700 年ごろのことである。

2 「神の民」——奴隷に

時は移り、ヤコブ (イスラエル) の子孫がエジプトであふれるほどに増えたとき、ヨセフのことを知らない新王が出現し、「神の民」(the People

of God) (士 20・2；サム下 14・13 ナド) を奴隷にしてしまう。

だが、エジプト下向から「430 年」を経た紀元前 1250 年ごろ、ヤコブ (イスラエル) の子孫からモーセが現れ、事態は急変する。モーセに、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」(出 3・6) が顕現し、「わが民イスラエルの人々」(出 3・10) をエジプトから連れ出すよう命じる。同時に「神」はモーセに、「わたしは主 (the Lord)」、名は「ヤハウエ (JEHOVAH)」と名乗る (出 6・2-3)。

モーセは「妻子を別にして、壮年男子だけでおよそ 60 万人」(出 12・37 ナド) をエジプトから連れ出し、族長たちの故郷カナンを目指す。

逃避行は苦難の連続、荒れ野で水・食料がなく、モーセは石打ちで殺されそうになる。そんなとき好戦的なアマレク人^{びと}に遭遇し、モーセ指揮下で応戦、大量の戦利品をえる (出 15-17 章；古代誌 1、245-61 頁)。

一行はホレブ (シナイ山^{さん}) に到着、ここで「主」がモーセに「殺すな」「盗むな」をふくむ「十戒^{じっかい}」をさずける (出 19、20 章)。だがのちに「主」は「報復」「攻撃」も認め、敵が「降伏」に不服従なら殺せ、などとも命じている (民 31・2；申 20・10-18)。

3 「全能の神」——実体は「民族神」

一行はシナイ山を発ち、窮迫のなかカナン国境近くまで来ると、再び多くの者がモーセと兄のアロンを責め、この 2 人を「石で打ち殺し」「エジプトへ帰ろう」と (民 11、14 章)。

モーセは仲間の反抗・反乱に堪え、行軍、主の許^{じん}しでカナン人と交戦、絶滅させ、つぎにアモリ人^{じん}、バシャンなどとも戦い、王、兵、住民を殺害、略奪、領土を「占領」する (民 21、31 章；申 2・24-；古代誌 1、359-63、380-82)。

一行がヨルダン川東岸まで来たとき、モーセはモアブ領のカナンをみわ

たすネボ山^{やま}で命つきる（申 32・48-50、34・1-5）。かれを継いだのはヨシユア。カナンはいまや異邦人の地、武力なしでは侵入できない。ヨシユアはヤハウエの召命をえて（ヨシユ 6・21、8・1）、徹底的に戦い、略奪、殺害する。そしてヨシユア死後、イスラエル人はカナン征服を成就する。前 1200 年ごろである。

それから 200 年近く経たとき、イスラエルにサウルが出現、統一王国を実現させる。だがサウル王（位前 1020 頃-前 1000 頃）は主ヤハウエの信頼をつなぎとめることができない。主がかれに代えて、「王となるべき者」と選出したのは羊飼いのダビデ少年（サム上 16・1）。まもなくダビデの上に「主の霊」がはげしく降^{くだ}る（サム上 16・12-13）。

ダビデがまだサウル王の家来であったとき、サウル王はペリシテ人と戦い、連戦連勝、「サウルは千を討ち / ダビデは万を討った」（サム上 18・7）。サウル王は間もなく戦死、ダビデが継承しイスラエル統一王国第 2 代王（位前 994 頃-前 961 頃）に就任する。

ダビデ王は主の託宣をえて異民族との戦いに連勝、金銀青銅などを略奪する。こうしてかれは終生「大きな戦争を繰り返」し「多くの血を大地に流」すが（代上 22・8）、いつも主なる神の庇護下にあった。¹

上述のように、モーセからダビデにいたるまでイスラエルの指導者はみな、略奪、殺戮を繰り返すが、その行為はつねにヤハウエの召命または庇護下においてである。かつてヤハウエはモーセに「盗むな、殺すな」と命じたが、その戒律はイスラエル民族の掟、民族法であり、異邦人は適用外なのだ。このことは、ヤハウエが「同胞には利子を付けて貸してはならない」「外国人には利子を付けて貸してもよい」と命じていることから明らか。²

つまり、「イスラエルの神」（出 24・10；民 16・9 ナド）は「天地万物」創造の「全能の神」と規定されたが、実体は守護神、民族神である。全能

神とはある民族のみを偏愛する卑小な存在ではない。

4 「神の民」——異民族の支配下に

ダビデ王は前 961 年ごろ死亡。息子のソロモン王（位前 961 – 前 922）が継ぎ、全イスラエルの王に就任、統一王国全盛時代を現出する。

だがソロモン王死後、王国はサマリアを首都とするイスラエル王国（北王国）（前 922 – 前 721）と、エルサレムを首都とするユダ王国（南王国）（前 922 – 前 586）に分裂する。前者は前 721 年アッシリア帝国に征服されるが、後者はアッシリアの属国とされながらも前 609 年、新バビロニア帝国によるアッシリアの征服まで持ちこたえる。

新バビロニア帝国にネブカドネザル 2 世が現れ、前 598 年、ユダ王国の首都エルサレムを攻略、次いで、その昔ダビデ王が構想、ソロモン王が創建した神殿（第 1 神殿）に放火、ユダ王国のヨヤキン（エホヤキン）王と有力者のすべてをバビロンへ連れさる（バビロン捕囚）。

前 538 年、新バビロニア帝国は終焉する。征服者はペルシャ帝国（アケメネス朝）のキュロス（クロス）王であり、この征服で捕囚民は 60 年間の拘束から解放されパレスチナ中南部へ帰還する。帰還民の多くがユダ王国に属し、その地はユダ（ヤ）と呼ばれたことから、以来、住民はイスラエル人を含め、「ユダ（ヤ）の人」「ユダヤ人」と総称されるようになる。帰国後の前 515 年、ユダヤ人はエルサレム神殿（第 2 神殿）を再建（エズ 3 章 – 6 章）、このころからヤハウエ信仰はユダヤ教と呼ばれる。ちなみに捕囚後、パレスチナ以外の地に定住した人たちがディアスポラのユダヤ人である。

上述のように、「神の民」はエジプトで奴隷にされたあと、カナンで統一王国を築き繁栄するが、その後は長年月の間異邦人の支配下に置かれている。「全能の神」は「わが民イスラエルの人々」を守護できなかったの

であろう。

律法

1 「律法」

「律法」とは旧約聖書の最初の5書、つまり創世記から申命記までをいう。「神」がモーセに口述したとされるところから「モーセ5書」「トーラー」とも呼ばれ、この中に「十戒^{じっかい}以外」に「600以上の諸規定」が含まれる。³これらは「主の言葉」・「命令」で絶対不可侵、故意に「破」れば「必ず断たれ」る（that soul shall utterly be cut off）（民15・30-1；ヘブ10・28）。

2 「律法」の不条理——「安息日」狙いの攻撃

「律法」の中に「安息日」規定があり、「神」はモーセに「6日の間働いて」「7日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。」（出20・10）、「安息日には、あなたたちの住まいのどこでも火をたいてはならない。」と（出35・3）。ユダヤ人はこの掟を死守する。それを「汚^{けが}」せば「必ず死刑」だからだ（出31・14）。

紀元前4世紀のヘレニズム時代、ユダヤは次の経緯でギリシャ人に支配される。

前332年、ギリシャ人の一派マケドニア人のアレクサンドロス（アレキサンダー）3世（大王）がペルシャ帝国を征服、エジプト、シリア、パレスチナなどを支配下にいれ、さらに前330年、中央アジアを経て西北インドにまで進む。だが前323年かれは熱病で急死、大帝國は瓦解する。

次の支配者は同大王の部将マケドニア人のプトレマイオスで、前320年ごろユダヤを攻めエジプト領に編入、前301年ごろも攻め落としている。

「攻め」とはいえ、かれは2度の攻撃で汗も血も流していない。「安息日」を狙ったからだ（古代誌4、14-5頁）。ユダヤ人はこの日は外敵に攻められても「いかなる仕事」もしない。

これでは「主ヤハウエ」は「わが民」を守護しているとはいえない。「律法」は不合理、不条理である。それもそのはず、「主ヤハウエ」はユダヤの守護神・民族神、「律法」はユダヤの民族法、それらは共にユダヤにとって至高至上であっても異邦人は関知しない。ゆえに、「律法」は異民族・異邦人の前では無効とされなければ、プトレマイオスの「攻め」のように、ユダヤは致命的な損失を被る。

おそらく、上記プトレマイオスの「安息日」狙いの攻撃は、ユダヤ史上最古例に属するだろう。

ちなみにプトレマイオスは前304年、プトレマイオス1世として即位、エジプト王国プトレマイオス朝（前305 - 前30）を開幕する。

3 ギリシャ人支配下のユダヤ

前198年ごろユダヤの支配者はエジプト王国からセレウコス朝シリア（シリア王国）（前312 - 前63）に代わる。やはりアレクサンドロス大王の部将で、マケドニア貴族出身のセレウコス1世の興した王国である。この王国に第8代王安ティオコス4世エピファネス（位前175 - 前164）が現れ、前170年ごろエジプトに侵攻、失敗する。帰路、かれはユダヤの内紛、つまり律法固守派とヘレニズム的改革受容派との間に内紛があるのを知り、今こそユダヤを攻撃、エルサレム占領、神殿に侵入、祭具の略奪などを行う（旧約、96頁）。

アンティオコス4世は以後3年半の間、王の勅令でユダヤ人に「律法」を廃棄させ、神殿の祭壇に「異教の祭壇」を設置、そこで「豚」を殺し、命令不服従者に「死刑」を課す（一マカ1・41-50）。ユダヤ教の禁止、

ヘレニズム化の強制である。

ユダヤはこうしてアレキサンダー大王時代の前 332 年ごろからアンティオコス 4 世時代の前 174 年ごろまでの約 160 年間ギリシャ人の支配下におかれる。ユダヤはエルサレム神殿を中心とする宗教国家とはいえ、ギリシャ文化の空気も吸わされていたのだ。ゆえに、そこにヘレニズム的改革受容者がいても不思議はない。後世、ユダヤ人のいくらかは「律法」と「神の民」を放棄するが、その土壌はギリシャ支配下で培われたのかもしれない。

4 最初の「律法」「安息日」破り——ハスモン家のマッティアス

ユダヤ人には「全能の神」の民という自負がある。かれらの中からアンティオコス 4 世のユダヤ教禁止に反抗する人が現れても当然だろう。ユダヤの地方祭司ハスモン家のマッティアス（マタティア）は前 168 年、アンティオコス 4 世の将軍が異教様式での犠牲奉獻を強要したのに激怒、5 人の息子たちと団結しその将軍と少数の兵士を切り殺す。その後マッティアス父子らは同胞を率いて荒野へ逃亡。そこへ兵士が追って来て、ユダヤ人の逃げ込んだ洞穴に放火、約 1000 人を焼殺する。その日はまさに「安息日」、ユダヤ人は無抵抗であった。⁴

マッティアスはこの惨劇を目前に、「自分たちは全員、戦わずして絶滅してしまう」と同胞に訴え、これが効いて、ユダヤ人は「以後今日にいたるまで、もし必要とあれば、安息日といえども武器を取ることにしている。」と、フラウィウス・ヨセフスは紀元後 95 年頃完成の『ユダヤ古代誌』で記している（古代誌 4、84 頁；一マカ 2・39-41）。

マッティアスの呼びかけは「律法」違反、「死刑」である。だが彼はこの違反なくしてユダヤの存立はあり得ないと悟ったのだ。問われるべき対象は「律法」であり、「律法」は異民族の前では無効・廃棄されるべきで

あることを示している。繰り返すが、「律法」はユダヤの民族法、その死守を命じている「主ヤハウエ」はユダヤの民族神であり、これらは共に異民族には通じない。

マッティアスは、ヨセフスに依拠する限り、民族自衛という点で、「律法」の「安息日」規定を汚した最初のユダヤ人ということになる。

5 「律法」破りの報酬——ユダヤ独立

マッティアスは前 167 年ごろ死亡、子どもたちが対シリア戦争「マッカバイオス（マカベア、マカバイ）戦争」（前 166 - 前 142）を引きつぎ、前 142 年エルサレム占領、勝利する。ユダヤはシリア支配から解放され、宿願の独立を達成する。ユダヤ人を救ったのは皮肉なことに「イスラエルの神」というよりも、「神」の命令に背いたマッティアスとその子どもたちであろう。

6 「律法」の不条理——「安息年」

前 136 年、マッティアスの 2 男シモンはユダヤを 8 年間統治したあと娘婿プトレマイオスに殺害される。

シモンの 3 男ヨアンネス・ヒュルカノス（ヨハネ・ヒルカノス）1 世は大祭司職を引きつぎ、統治者（位前 136 - 前 105）に即位、そして要塞に逃げこんだプトレマイオスを包囲する。だがプトレマイオスに幸運なことに、7 年に 1 度の「安息年」がはじまり、包囲は解かれる。かれはこれを悪用、この時とばかりに投獄中のシモンの妻と 2 人の息子を殺害、逃亡する（戦記 1、36 - 8 頁；古代誌 4、186 頁）。なんと不合理、不条理か。ちなみに「安息年」は「律法」にこう記されている、「七年目には全き安息を土地に与えねばならない。これは主のための安息である。」（レビ 25・4）。この掟自体、「安息日」同様、ユダヤ民族には神聖不可侵に相違ない

が、異邦人・異民族には通用しない。プトロマイオスが生粋のユダヤ人かどうか、そしてその「安息年」とプトロマイオスの解放がどう関係するのか詳細は分からないが、事実は「解放」「殺害」「逃亡」があったということである。

7 「律法」の不条理——ユダヤ独立喪失

前64年、ローマの将軍ポンペイウスがセレウコス朝シリアを征服、ローマの属州に併合する。同年秋ポンペイウスは、権力闘争に余念のないハスモン家のアレクサンドロス・ヤンナイオスの長男と次男をダマスコで尋問、長男ヒュルカノス2世を支持、次男アリストブロス2世を監禁する。その後にポンペイウスはエルサレムへ進軍、当地で和戦派の協力を得てエルサレム市内と宮殿を支配する。

他方、主戦派は神殿に籠城。ローマ軍は攻城に備え、「安息日」に神殿前の溪谷を埋め、包囲3ヶ月目の前63年春の「断食日」に神殿になだれこむ。もっとも、「安息日」といえども、ユダヤ人はハスモン家のマッティアス以来、「戦いを仕かけ」られたら防戦することになっている。が、「それ以外の場合敵が何をしようとも」防戦できないのだ。「神」の命令に服するためである。こうしてユダヤ側の死者「1万2000」人、ローマ側は「ごく少数」。この戦中、祭司の多くは「律法」順守の立場から虐殺現場を目の当たりにしながらも犠牲の奉献に忙しく、祭儀を粛々と続ける。⁵ユダヤの「神」はここでも「わが民」を守護しないばかりか、放擲している。「律法」は異民族の前では呪うべき戒律である。

以上の経緯でユダヤはローマ軍に敗北、属州領とされ、シリア編入、「自由」喪失、ローマへの進貢国とされる（以上、戦記1、63-9頁、古代誌4、266-73頁）。

8 「律法」の不条理——鷲の「像」

前4年ヘロデ大王死の直前、ユダヤ人の間で不穏な動きが発生する。その1つはユダヤの最高学者・律法解釈者のユダスとマッティアスによるもので、かれらは若者に、ヘロデ大王が「律法」に背いて造った構築物のすべてを生命を賭して引き倒せと扇動する。若者は白昼、神殿大門上のローマ帝国の象徴である黄金製巨大鷲像を引き倒し、斧で砕く。「律法」は「いかなる像も造ってはならない」と（出20・4；レビ19・4；申4・15－19ナド）。

すぐさま警護隊長が出動、実行者40名以上と例の2学者を逮捕、ヘロデはその中から2学者と同志の幾らかを焚刑にする。「律法」はユダヤ人に過酷な結果をもたらす（以上、戦記1、234－36；古代誌5、301－06）。

9 「律法」の不条理——軍旗の「胸像」

第5代ユダヤ総督ポンティオス・ピラト（位26－36）は後26年、属州ユダヤへの就任にあたり、軍隊を率いて、地中海の港町、ユダヤ属州の首都カイサリア（カイサレイア）を發ちエルサレムへ乗りこむ。⁶なぜ軍隊か。総督としては初めて、ユダヤの「律法」が禁じる「像」、つまり「軍旗」付属のカイサル（カエサル；ローマ皇帝の意）の「胸像」を持ち込んだためである。

案にたがわずユダヤ人は猛反発、「大声でののし」り、ピラトに抗議。名誉と威信を傷つけられたピラトは、「切り殺す」と。ユダヤ人はひるむことなく、「律法を犯すよりは死を選ぶ」と首を差しだす。ピラトは驚き、「軍旗」を撤去、カイサリアへ戻る（古代誌6、31－2頁；戦記1、289頁）。

ピラトは撤退したが、「律法」はユダヤの民族法、それを宗主国に受容させようとするところに無理があるだろう。この場は切り抜けたが、ユダヤは後述のように、これ以後もローマや周辺国相手に、「律法」に起因す

る緊張関係を引きおこす。

10 「律法」の不条理——カリグラ帝の「像」

37年3月、ガイウス・カリグラが第3代ローマ皇帝（位37-41）に就任。カリグラ帝は「神とみなされ」ることを欲した人物で、ユダヤ人にも受容させるため、シリア知事ペテロニオスにかれの「像」をエルサレム神殿内に立てるよう厳命する。

ペテロニオスは事の重大さを認識し大軍を組織、シリア州の首都アンティオキアを出立、ガリラヤ地方の海岸都市プトレマイスで冬季宿営する。彼はガイウス帝宛に、春には戦争へ突入する旨書き送ると、帝は「ユダヤ人が服従しないならば激烈な戦闘で報復するよう」命令。折しもそこへ、何万人ものユダヤ人が押しかけ、「律法」の侵害は「神」の禁を犯すこと、強行するなら「ユダヤ人全体」は「殺される覚悟ができています」と。

ペテロニオスは軍隊を残してガリラヤに入り、著名人と群集を集め、属領の「すべての民族がそれぞれの町で彼らの神々の像と一緒にカイサルの像を立てているのに、おまえたちだけがこの慣習に反対するのは、ほとんど叛乱に等しい侮辱である」と。だがユダヤ人は屈服しない。ペテロニオスはその激しさに恐れをなし、軍隊をアンティオキアへもどす。この措置にカリグラ帝は激怒、ペテロニオスに「自決」を命じる手紙を書き、使者に持たせる。だが使者の船が嵐で遅れ、その間にカリグラ帝暗殺の報が先行、ペテロニオスは危うく命拾いをする。⁷ユダヤ人も難を逃れたが、成り行きによっては大流血もあり得た。

ユダヤ人はペテロニオスの言うように、「律法」ゆえにその民族性を気難しくしている。後年、といっても後66年のことだが、アグリッパ2世が、血気にはやるユダヤ人を前に、総督フローロスへの復讐をやめるよう

説得する演説の中で、アテネ人、スパルタ人、マケドニア人、エジプト人、アラブ人など多くの民族がローマ人に服しているのに、ユダヤ人が服することなく、ローマと戦うことになれば破滅は明白、服従にまさる方法はないと長広舌をふるうが、通じない（戦記2、335-53頁）。この直後、ユダヤはローマと全面戦争に突入する。

「神」の命令である「律法」はユダヤに平和と安寧をもたらすことに寄与していない。「律法」は「背負いきれない重荷」なのだ。間もなくユダヤ人の中からこの「律法」を批判する人が現れ、ごく少数の人たちであるが、廃棄へと動く。

11 「律法」の不条理——洗礼者ヨハネ

バプテスマ（洗礼者）のヨハネは後26、27年ごろユダヤの荒れ野に現れ、「天の国は近づいた」と⁸宣べ伝え、多数に洗礼を施す。一定の活動のあと彼は、イエスに「狐」と呼ばれたガリラヤとペレアの領主ヘロデ・アンティパスに逮捕され、後37年ごろペレアの南端、死海近くのマケルス（マカイロス）要塞で殺害される。⁸ 逮捕理由は、かれがヘロデ・アンティパスとヘロディア（ヘロデヤ；マリアンメ1世の孫娘）の結婚に反対したからだ（マタ14・3-4；マコ6・17）。なぜ反対か。「律法」は兄弟の妻との結婚を禁じているからである（レビ18・16、20・21）。ヘロディアはヘロデ・アンティパスの異母兄ヘロデ・フィリポの妻だったが後30年ごろ離婚し、やはり前妻と別れたヘロデ・アンティパスと再婚した。⁹

ヨハネは「律法」に従ったために殺され、従わなかったヘロデ・アンティパスは生き延びた。「律法」は不合理。もっとも、ヘロデ・アンティパスはのちに領地追放、流刑の運命をたどるが——。

12 「律法」の不条理——民族紛争

66年、といえは後述の宗教改革後のことであるが、ユダヤ属州の首都カイサリア（カイサレイア）でギリシャ人とユダヤ人の紛争が発生する。この件でユダヤ総督フローロスはユダヤ人から賄賂を受け取るが、紛争自体は放置する。次の日はユダヤの「安息日」で人々が会堂（ユダヤ教のシナゴグ）に集う日だ。カイサリア市民のある者が会堂入り口に、壺を逆さまに置き、その上で鳥を犠牲として捧げる。この行為は「律法」で定める癩病人潔めの儀式であることから（レビ14・1-）、ユダヤ人は激怒し、律法侮辱だ、その場が汚された、と。ギリシャ人との衝突に発展する（戦記2、320-21頁）。

「律法」に定める儀式は異邦人には理解しがたい。「癩病人潔めの儀式」も異邦人の目から見れば風変わりな風習で揶揄の対象ともなる。

宗教改革

1 ユダヤ騒乱

ヘロデ大王は良くも悪くもユダヤに大きな足跡を残した。エルサレム神殿の改築に着手、2つの王宮建設、新都市・新港湾・諸建造物・要塞建設など大土木建設工事を行い、ユダヤに一定の貢献をする。だが彼はあまりに狂暴冷酷であったためにユダヤ人の憎悪を買う。

大王は死の直前、妹サロメとその夫アレクサスに告白する。つまり、ユダヤ人が自分の「死」を「いかに熱心に祈りつづけているか」、自分が「死んだら彼らがどれほど喜ぶ」か「分かっている」、かれらは「生前から執拗に反抗を繰り返し」ていたのだから、と（古代誌5、308-09頁）。

前4年3月大王死。同じ春、エルサレムで大王への「復讐」「革命活動」の騒動が発生、大王の息子アルケラオス（アケラオ）の兵士が制圧に出るが、逆に多数殺され、軍隊が出動、暴徒3000人を殺害する（古代誌5、

319-23 頁)。

この後も「ユダヤ全国民の間に不穏な空気」「反乱」「革命的気運」があり、これをシリア総督ウェアロスが鎮圧するが、かれがシリア州の首都アンティオキアへ帰るや、再び「ユダヤ各地」で「無数の騒乱」が発生する。再度ウェアロスが出動、反乱首謀者ら 2000 人を磔刑にする（古代誌 5、333-45 頁）。

他方、ユダヤ人は 50 人の使節団をローマへ派遣、ローマ在住のユダヤ人 8000 人以上と合流、アウグストゥス皇帝に「王政」廃止、「自治権」確立、「シリアの 1 州」を直訴する（古代誌 5、346-50 頁）。

このようにヘロデ大王死後、ユダヤの社会情勢は著しく不安定になる。

2 ガリラヤ人ユダ（ユダス）の反乱——「神こそ唯一の支配者」

後 6 年、シリア総督にキュリニオス、ユダヤ駐在初代総督にコポニオスが就任。キュリニオスはユダヤを訪れ、コポニオスと共同でユダヤ人の財産・住民登録に着手する。これに激しく抵抗するのがガリラヤ人ユダ（ユダス）で、ユダヤ人を「奴隷状態」に追い込むとし、「神」こそ「唯一の支配者」と確信、「流血の殺戮」をいとうことなく、「自由」と「ローマからの独立」を叫ぶ。¹⁰

ユダの影響下で同 6 年、ファリサイ派のザドク（サドコス）がゼロテ（ゼーロータイ）（熱心党）、つまり「神のために熱心な者」の集団を結成、「神の国がまもなく到来するという熱烈な期待」を抱きながらユダヤ独立の反乱に加わる。¹¹ ちなみにこの「熱心党」は新約聖書にイエス 12 弟子の 1 人「熱心党のシモン」（マタ 10・4；使 1・13 ナド）という形で登場する。この党はメシア到来を熱烈に待望する。

ユダとザドクらの反乱は鎮圧されるが、その主張は「神の国」の接近感と、「救い主」「メシア」待望熱をあおりながら「急速に進展」、大きな勢

力となっていく。その大きさを言えば、ヨセフスは彼らの教義を「第四の派」「第四の異端の哲学」と呼び、ユダヤの「三大宗派」——エッセネ人、サドカイ人、パリサイ人の三大哲学——に次ぐものと定義していることから察せられる（古代誌 6、15-21 頁）。

その「第四の派」は、ユダの「子」、ヤコボスとシモン兄弟に継承されるが、かれらはユダヤ総督ティベリオス・アレクサンドロス（位 46-48）によって逮捕・磔刑にされる（古代誌 6、266-67 頁）。ユダに「孫」のエレアザロスがあり（戦記 3、161 頁）、過激な反ローマ主義の点でユダの継承者である。エレアザロスが率いた一派は「メシア的武闘党派」で、「シカリオイ」（シカリ党）の名で知られ、‘シカリ’という短剣を隠しもつ暗殺集団であり、「行わなかった悪事はな」い（旧約、871 頁；戦記 1、313 頁；戦記 3、161-64 頁）。

シカリ党は熱心党と区別されるが、ユダの孫からシカリ党指導者が出たことを見ると、両者の主張には通底する所があったのかもしれない。シカリ党の活動が顕著になるのはユダヤ総督アントニウス・フェリクス（ペリクス）（位 52-59；使 23：24-）の時代以後である。

ユダとザドクの「神こそ支配者」とするローマ帝国への反抗はユダヤの方向を誤らせることになる。ヨセフスはいう、かれらは「あらゆる種類の不幸をわが民族にもたらすことになった。」（古代誌 6、15 頁）。

3 メシア運動

「メシア」とはヘブライ語で「油を注がれた者」の意、イスラエルでは「王」が就任式で塗油された。のちに、この「王」は国を治める「理想王」、神の救いをもたらす「救い主」を示すようになる。「キリスト」は「メシア」のギリシャ語訳、ゆえに 2 語は同義、「イエス・キリスト」（‘Jesus Christ’—Acts 3:20）というとき「メシアなるイエス」の意である

(新共同訳、裏頁 25、41；旧約、103 頁)。

「神」を頂点に奉るユダとザドクの主張はメシア熱をはびこらせ、人々は集団感染、メシア運動を形成していく。この運動は「預言者」、つまり「神の啓示をうけ、神の名によって語る人」(新共同訳、裏頁 42) の出現をも促す。イエス時代、メシア・預言者が多数現れているが、真贋を決する規準はない。

バプテスマ(洗礼者)のヨハネはメシア運動の系列に属した人で「預言者」または「預言者以上の者」(マタ 11・9、14・5 ナド) と見られ、後 26、27 年ごろユダヤの荒れ野に現れ、「悔い改めよ。天の国は近づいた。」と終末の接近を^の宣べ伝える。多くの人々が「エルサレムとユダヤ全土」などから来て「罪を告白」、ヨルダン川でヨハネから「洗礼」を受ける(マタ 3・1-6 ナド)。

イエスもヨハネから受洗し(マタ 3・13)、郷里ガリラヤへもどって 27、28 年ごろ「時は満ち、神の国は近づいた」と^の宣べる(マコ 1:14)。かれは「預言者」(マタ 21・11 ナド)、「メシア、生ける神の子」(the Christ, the Son of the living God) (マタ 16・16 ナド) などと見られたが、みずからは政治的解放者のメシアを拒否し、人々を罪から救うメシアと主張する。¹² だがその主張のために、かれは律法学者、祭司長、長老らから「メシア」僭称者とみなされ、逮捕、最高法院(サンヘドリン)で「死刑」を決議、翌日総督ピラトに引き渡され、反ローマ的な「ユダヤ人の王」の罪状で後 30 年から 32 年ごろ十字架刑が執行される。¹³

当時、ヨハネやイエス以外に、(偽)預言者・(偽)メシアが多数出現したことは、イエスの予告、「偽メシアや偽預言者が現れて、大きなしるしや不思議な^{わざ}業を行い、できれば、選ばれた人たちをも^{まど}惑わそうする」(マタ 24・11、24) で推量できるし、またヨセフスがユダヤ戦争(第 1 次)の記述の中で「そのころ、多くの偽預言者が暴君たちによって雇われてい

た。この偽預言者たちは神の助けがあるからそれを待つようにと告げて市民をたぶらかしていた。」(戦記 3、70 頁)でも確認できる。

メシア熱はパレスチナ全土で断続的、爆発的に広がっていたのであり、ユダヤはそれほどまでに不穏、不安定、喧騒であった。人々は救われなければならず、「国の建て直」しが必要であったのだ。巨星イエスが現れたのはそういう時である。

4 「律法」破り——生前のイエス

イエスは生前、「律法」に強いこだわりがあった。かれは言う、「天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない」(マタ 5・18)、「最も小さな掟を1つでも破」る者は「天の国で最も小さい者と呼ばれる」(マタ 5・19)。イエスは律法遵守である。

だがかれは弟子に「安息日」に仕事を休ませていない。それを、ファリサイ派の人たちが咎めると、イエスは「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。」(マコ 2・23)。ファリサイ派はこれを容認するわけがない。彼らにとって「安息日」は「あなたの神、主の安息日」なのだ。イエスは律法遵守だが厳守とはいえない。

イエスは「律法」にかかわって律法学者やファリサイ派を批判して言う、「彼らは背負いきれない重荷をまとめ、人の肩に載せるが、自分ではそれを動かすために、指一本貸そうともしない。」(マタ 23・2-4；ルカ 11・46)。実際、「律法」には「十戒以外に、神がモーセに口述したと言われる 600 以上の諸規定」が含まれ、まったく「背負いきれない」のだ。そしてこの「律法」をイエスはもはや期限切れとも示唆している、「すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである」(マタ 11・13)。さらに言う、「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するため」でなく「完成するため」と(マタ 5・17)。ユダヤ教支配者の神経を逆なでする発

言である。イエスは「律法」に強い不信、懸念、懐疑があったことは確かだ。

ユダヤには「律法」を守るための人為的規則「昔の人の言い伝え」があるが、イエスはこの点でも弟子たちに厳守の立場をとらせていないし（マタ 15・2）、「断食」も励行させていない（マタ 9・14）。¹⁴ こうした行為はユダヤ教支配者をいら立たせることになるが、イエスは妥協せず、鋭く対立する。

イエスは神がモーセに命じた形では「律法」を受容しないばかりか、明らかに「律法」破りである。この違反行為を、当時ファリサイ派の熱心なユダヤ教徒だったパウロ（パウロ）は憤怒の念で見えていたはずだが、のちにかれは回心し、イエスの「律法」破りを擁護してこう言う、「もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。」（ガラ 2・21）¹⁵

のちにより詳しく触れるが、パウロはイエス・キリストを「律法」の上に位置づけ、「律法」に信を置いていない。かれはイエス生前の活動を「律法」否定と見なしている。

5 「国を建て直」す

イエスは死後「3日目」に復活し、「四十日」の間弟子たちにあらわれ、天に昇る。その直前、弟子たちは「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか。」「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。」とイエス。

つまり、弟子たちはイエスの死後、ユダヤの混沌とした情勢を憂え、「国」の「建て直し」を思案模索していたのだ。かれらは山から下り、エルサレムに戻る（使 1・1-12）。そしてガリラヤ出身の使徒3人、すなわちペテロ、ゼベダイの子ヨハネ、イエスの兄弟ヤコブが「柱」となり、¹⁶

他の8人の使徒とイエスの親族を交え、エルサレムの「泊まっていた家の上の部屋」に集まり、イエスの再臨を祈る（使1・11-14；ガラ2・6,9）。

ちなみに、上記「8人の使徒」の中の1人は「熱心党のシモン」、かれは「党」を離れ、イエスの弟子になり、ペテロらの国の建て直しに共鳴したのだらう（マコ3・13-19ナド；使1・6、12-14）。

6 イエスは「メシア」——ユダヤ教一派の「教会」（改革の第1段階）

「五旬祭」の日、「一同」に「精霊」が降り、ペテロは民衆に語りかける。「ナザレの^{ひと}人イエスこそ、神から^{つか}遣わされた方」、「神」はイエスを「復活」させ、「^{しゅ}主とし、またメシア」（both Lord and Christ）とした、と（使2・14-36）。

ペテロの教えはユダヤ教支配者を侮辱する行為である。かれらはイエスを「神の子、メシア」僭称者として処刑したのだ（マタ26・63ナド）。しかもペテロはイエスを「主」と呼ぶが、ユダヤ人の「主（the Lord）」は「ヤハウェ（JEHOVAH）」である（出6・2-3）。つまり、ペテロはヤハウェ信仰ではなくイエス・キリスト信仰を宣揚する。

すぐに「三千人ほど」の人たちが仲間にくわり、持ち物を「共有」、共同生活をはじめ、エルサレム神殿に日参する（使2・14-47）。ユダヤ教一派の「ナザレ人の分派」（使24・5、28・22）、つまりエルサレムの「教会」の発足で、イエス死後まもなくのことだから後30年から32年ごろである（旧約、450頁）。¹⁷

ペテロとヨハネはエルサレム神殿でもイエスの「復活」を民衆に^の宣べ伝え、「五千人ほど」の男性を引きつける。この行為に、「祭司たち、神殿守衛長、サドカイ派の人々」は黙っていない。2人を逮捕、翌日まで拘留する（使3・11-4・4）。

次の日、「議員、長老、律法学者たち」と「大祭司アンナス」らがペテ

ロとヨハネに尋問すると、ペテロは「イエス・キリストの名」により説教したと堂々と答える。尋問者たちは2人の態度が「大胆」であることと、2人がともに「無学な普通の人たち」（使4・13）であることに驚く。

ペテロとヨハネは釈放されるが、「イエスの名」によって話すなど脅される（使4・17-18）。大祭司らはイエスを偽メシアとして処刑していた。

こうしてペテロとヨハネの「無学な普通の人たち」はヤハウエ信仰でなくイエス・キリスト信仰を宣揚する。ユダヤ社会の閉塞の打破をここに見たのだ。「国を建て直」す第一歩である。

7 迫害下での増勢

上述のペテロとヨハネの逮捕は、ユダヤ当局による最初の迫害である。つぎの迫害は32年ごろ、大祭司ヨセフ（カヤパ、カイアフアとも）とその仲間のサドカイ派によるもので、ペテロら使徒全員が逮捕・投獄される。だが夜中に助けだされ、夜明けごろ神殿境内で民衆に教える。そしてまたもや逮捕、最高法院で大祭司から尋問され、その後に釈放されるが、尋問の中で、「神」がイエスを「救い主」（'a Prince and a Saviour'）としたなどと発言し殺されそうになる。このとき、律法の教師ガマリエルが介在し、「イエスの名によって話してはならない」と命令する（使5・17-42）。

ガマリエルの命令ではあるが、使徒たちは構わず、毎日、「神殿の境内や家々」で「メシア・イエス」を教え、「弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った」（使6・7）。

エルサレムで「祭司」も回心した状況を見ると、ユダヤ社会の混沌は小さくなかったのだろう。

8 神殿、律法批判——ヘレニストの信徒（改革の第2段階）

そのころ（32年頃）エルサレムの教会に「ギリシャ語を話すユダヤ人」、つまりディアスポラのユダヤ人（バビロン捕囚後、パレスチナ以外の地に定住したユダヤ人）が加わる。かれらは、ギリシャ文化圏の人たち（ヘレニスト）であるからエルサレムに来ると、偏狭で独善的な「律法」「神殿」に批判的になる。ちょうど異邦人・異民族がそれらに違和感を示したようにである。筆頭はステファノ（ステパノ）で、議論に強く、相手を霊的知性で論破するものだから、憎まれ、「この男は聖なる場所と律法をけなす」と、最高法院に訴えられる（使6・1-15）。ステファノは弁明の中でユダヤ教の儀式・神殿などを批判、イエス殺害の非難で締めくくる。当然のごとく当局に睨まれ、結果、投石で殺されて最初の殉教者となる（使7・1-60；旧約、1368頁）。

そしてこの日、ユダヤ教団はエルサレムの教会に「大迫害」をくわえる。信徒の中で、教会の使徒12人をのぞき、ヘレニストたちは皆（旧約、659頁）、ユダヤとサマリアの地方へ散り、そこで「教会」を設立、さらにダマスコ、アンティオキア、ローマなどへ拡散させていく。¹⁸ 教会迫害は結果として、ヘレニスト信徒の「神殿」「律法」批判を広報することになる。改革の第2段階である。

9 「律法」破り——フィリポ（改革の第3段階）

異邦人宣教は「律法」破りである。なぜなら「ユダヤ人が外国人と交際したり、外国人を訪問したりすることは、律法で禁じられている」から。¹⁹

イエスは異邦人宣教の点で「律法」に忠実であった。かれは弟子に「異邦人の道に行ってはならない。また、サマリア人の町に入ってはならない。」（マタ10・5）と命じているからだ。だがこれとは別に、世界宣教命令も出しているが（マタ28・19ナド）、こちらの方は後世の福音書記者の創作、潤色であろう。イエスがそんな矛盾を犯すはずがない。²⁰

上述のように、32年ごろユダヤ当局の大迫害があり、ヘレニストの信徒はユダヤとサマリアの地方へ散った。フィリポ（ピリポ）はその1人で、かれはサマリアでキリストを^の宣べ伝える（使6・3-5、8・4-5）。そこへエルサレムの教会からペテロとヨハネが派遣されてきて、かれらも村々で福音を告げ、エルサレムへもどる（使8・4-25）。フィリポの布教はエルサレム教会の公認を得たことを意味する。

ちなみにサマリアという土地は前4年以来、ユダヤとイドメヤ（イドマヤ）とともに、ヘロデ大王の息子ヘロデ・アルケラオスの領地であったが、後6年以後、ローマの属州（属領州）に格下げ、シリアに編入されている。イエスは「サマリア人の町に入ってはならない。」と命じていたから、フィリポの宣教はユダヤ人に限定されたのであろう。

だがこのあと、フィリポはガザへ下る道で異邦人のエチオピア人^{かんがん}宦官に会い、「洗礼」をさずける（使8・26-39）。²¹明らかに「律法」破りであり、しかもイエスの命令を超えている。ヘレニストのフィリポにはユダヤ人と異邦人との間に高い垣根はなかったに違いない。かれは異邦人宣教の先駆ということになるが、その行為がエルサレム教会のお咎めを受けていないところを見ると、エルサレムに感知されなかったか、あるいは時期的に見て、後述の使徒会議のあとだったのかもしれない。いずれにせよ、異邦人宣教は「律法」破り、イエスの命令違反であり、これを乗り越えていくところに改革の第3段階を見る。

10 イエスは「メシア」——サウロ（パウロ）

サウロ（パウロ）がまだファリサイ派の熱心なユダヤ教徒であったとき、ステファノの殺害に賛成し殺害現場にもいた（使7・58、8・1、22・20）。だが32年から34年ごろ、キリスト教徒迫害のためにローマの属領シリアのダマスコ（ダマスカス）へ向かう途中、突然イエスの声に打たれ

て回心、天上のイエスから「異邦人」や「イスラエルの子ら」にイエスの「名」を伝えるよう選ばれる。つまりパウロは、イエスのユダヤ教団批判と彼の崇高さにユダヤの救いを見たのだ。そして「洗礼」を受けたあと、ダマスコのあちこちの「会堂」（ユダヤ教のシナゴグ）で「イエス」こそ「神の子」と宣べ伝え、「イエス」を「メシア」と論証する（使 9・1-22；ガラ 1・13-16）。パウロはユダヤ教団によるイエス死刑の罪状、「神の子、メシア」僭称者、を完全に破棄した。

パウロはその後アラビアへ行き、ふたたびダマスコへもどるが、35年ごろユダヤ人による暗殺の動静を知り、弟子たちの助けで城壁外へ逃れる（使 9・23-25；ガラ 1・17）。そしてエルサレムへ上り、バルナバの仲介でペテロ宅を訪問、15日間滞在、イエスの兄弟ヤコブたちにも会う（使 9・26-28；ガラ 1・18-20）。その間にユダヤ教徒から命を狙われるようになり、生地ローマ属州キリキア州の州都タルソス（現トルコ中南部）へ避難する（使 9・23-30）。²²

原始教会にとって「15日間」は重要な意味をもったと思われる。その後のキリスト教会の方向、つまり「異邦人」宣教、「律法」廃棄、ユダヤ選民思想打破などが話し合われたであろう。

11 「律法」破り、そして「神」の解放——ペテロ（改革の第4段階）

ペテロは35年ごろエルサレムでパウロと会見した後、パレスチナのリダ、シャロン、ヤッファ、カイサリアの各地を歩く（使 9・32-）。そしてカイサリアで、未割礼異邦人のイタリア隊百人隊長コルネリウス（コルネリオ）を訪問、「神は人を分け隔て」しない、「どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受けいれられる」と説き、²³コルネリウスとその家族、召し使いたちを「洗礼」にみちびく（使 10・1-48、11・14）。

ペテロは恐るべき大律法破りを敢行した。「未割礼」の「外国人を訪問」し、「神は人を分け隔てしない」として「洗礼」を授けたのだ。²⁴このどれを取っても、前例のない衝撃的な出来事であるが、とりわけ、「イスラエルの神」を「異邦人」に解放したことは画期的である。もはや「主ヤハウエ」は「わが民イスラエルの人々」とは言えない。換言すれば、「神の民」の破棄である。この破棄こそ「国を建て直」す要であろう。教会の外では、「神の民」を任じるユダヤ同胞が政治的解放者のメシアを待望し、「神の救いがある」と狂信している。その信仰の先は暗黒、絶望である。

ペテロの「律法」破りと「神」の全人類への解放とは、実にユダヤがモーセ以来 1300 年間牢固として堅持してきた因習の打破、ユダヤ教の大改革といえる。改革は第 4 段階に達した。

案の定、ペテロはエルサレムへ上ると、「割礼を受けていない者」と「一緒に食事」したと非難される（使 11・1-3）。そこでペテロは、「彼ら」の上にも「聖霊」が「降った」と反論し、切り抜ける（使 11・1-18）。

エルサレム教会のペテロ批判から判断すると、ペテロの異邦人宣教は、教会が把握した最初の宣教であるようだ。²⁵

12 「律法」破り——アンティオキア教会

ステファノの殉教（32 年頃）後、ギリシャ語を話すユダヤ人（ヘレニスト）を含む信徒は各地へ散った。その中にはフェニキア、キプロスを経てシリア州の首都アンティオキアへ達した人たちがおり、かれらはそこで教会を設立、異邦人のギリシャ人に伝道する（使 11・19 - 21）。そこへエルサレムの教会からバルナバが派遣されて来て、かれらの宣教を喜び激励する（使 11・24）。アンティオキア教会は異邦人宣教でエルサレム教会のお墨付きを得たのだ。「律法」破りは奔流の勢いである。

バルナバはその足でパウロ（サウロ）を捜しにタルソスへ行き、かれを

見つけてアンティオキアへ連れかえり、まる 1 年間 2 人でアンティオキア教会で多くの人を教え、「初めてキリスト者と呼ばれる」人たちを生みだす（使 11・25-26）。

これらの出来事はパウロとペテロの初対面（35 年頃）の後であるからおそらく 36、37 年ごろのことだろう（旧約、1369 頁）。

13 「律法」破り——パウロとバルナバ

47、48 年ごろパウロはバルナバと共にアンティオキアを起点に、バルナバの生誕地キプロス島（使 4・36）を経て小アジア方面へ宣教旅行（第 1 回）に出る。宣教地の 1 つ、小アジア南部の内陸部ピシディア州アンティオキアで、2 人はユダヤ人の会堂で説教し、ユダヤ人と異邦人の多数を改宗させる。しかし、福音を信じないユダヤ人にねたまれてイコニオンの町へ逃れ、ここでもユダヤ人の会堂で教え、またもや反感を持つユダヤ人と異邦人に妨害される。それでも 2 人の宣教は、大勢のユダヤ人やギリシャ人を改宗させるのに成功しアンティオキア教会に帰着、ここで、「神」が「異邦人に信仰の門を開いてくださった」と報告する（使 13・1-14・27）。

14 「律法」破り——エルサレム使徒会議（改革の完結）

上記パウロとバルナバの異邦人宣教ではあるが、この宣教がキリスト教会内で合意に達していたわけではない。あるとき、ユダヤの「ある人々」がアンティオキアへ下ってきて、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われぬ」（使 15・1）と教えたからパウロやバルナバと激論になる。

パウロたちはこの問題で使徒や長老たちと協議する必要に迫られ、エルサレムへ上り、エルサレムの「教会の人々、使徒たち、長老たち」に歓迎

される。だがファリサイ派から信者になった人たちが「異邦人にも割礼」を、「モーセの律法」順守を、と譲らない（使 15・5）。

そこで 48、49 年ごろエルサレムで使徒会議があり、ここでペテロが「ずっと以前」に体験したこと——コルネリウスの回心を意味したのだろう——でこう発言する。すなわち、そのとき「神」は「異邦人にも聖霊を与え」、「わたしたちと彼らとの間に何の差別」もしなかった、それなのに「先祖もわたしたちも負いきれなかった軛^{くびき}」を彼らに懸けてはいけない、わたしたち同様「異邦人も」、「主イエスの恵みによって救われる」と。次にパウロとバルナバが異邦人宣教の実情を報告し、最後にこれらを踏まえてヤコブが、「異邦人」に対し「偶像に献げられたものと、血と、絞め殺した動物の肉と、みだらな行いとを避けること」以外、「一切」「重荷を負わせないこと」を提起、決議される。²⁶

つまり、この会議で 1、「神」はイスラエルだけの神でなく世界の神である、2、未割礼の異邦人も救われる、3、異邦人は「偶像に献げられたものと [・ ・ ・]」の掟を除いて、律法から一切解放されると公式に結論された。繰り返すが、「律法」とは旧約聖書の最初の 5 書、つまり創世記から申命記までをいい、ここに定められた掟のほぼすべてがまったく意味をなさなくなったのだ。

ちなみに、上記 2 の「割礼」をいえば、それはイスラエル民族にとって「神」との「契約」のしるし、「無割礼の男」は「神」との「契約」不履行で「民の間から断たれる」（創 17・9-14）と定められているが、これも異邦人には破棄された。

大改革は完結されたのだ。もはや「天地万物」創造の「全能の神」「主ヤハウェ」は「イスラエルの神」でなく、全人類に開かれ、「神」の命令の「律法」の掟は事実上破棄された。モーセからいえば 1300 年の因習の打破であり、これが宗教改革でなくて何であろう。その変革を成し遂げた

のはユダヤの支配知識階級、つまり議員、長老、律法学者、大祭司たちではない。改革の原点は大工のイエス（マコ 6・3）であり、かれの行動と教説を漁師ペテロ（マタ 4・18）や漁師ヤコブ（ゼベダイの子でヨハネの兄弟）（マタ 4・21；ルカ 5・10）らの「無学な普通の人」たちが「イスラエルの国を建て直」すために継承した。そこへユダヤ人テント職（使 18・3）、かつ元「ファリサイ派」の「ユダヤ教徒」（使 23・6；ガラ 1・13-14）パウロが回心を経て加わり、狭量偏狭なユダヤ教を広量寛大な世界宗教、キリスト教へと昇華させた。

パウロはエルサレム使徒会議のあとシリア州の首都アンティオキアを起点に第 2 回宣教旅行（49 年から 52 年頃まで）を行い、小アジア、マケドニア、ギリシャへ（使 15・36-18・22）、そして第 3 回（53 年頃出発）もアンティオキアを起点にエペソ（エフェソ；ローマ帝国アジア州首府）、マケドニア、ギリシャへ行き（使 18・23-21・14）、世界宣教を実践する。

このころ、「ナザレ^{じん}人の分派」の対極にあったエルサレム神殿下のユダヤ教徒たちは、「メシア希望に非常に強く動かされ」（ブルトマン、23 頁）、「神の助けがあるからそれを待つように」（戦記 3、70 頁）とする根拠のない信仰に憑依されている。大祭司・律法学者らのユダヤ教支配者はだれ一人として同胞の危機を回避する決定的は方策を見つけ出せないでいる。「律法」に固執する人たちの宿命であろう。

15 使徒会議後のパウロ書簡

前述のエルサレム使徒会議のあとパウロは 8 通の書簡を表しているが、そこでの「神」「律法」「割礼」への言及は実にのびやかな筆致になっている。以下に「ガラテヤの信徒への手紙」（52、53 年頃執筆）、「ローマの信徒への手紙」（56 年頃）、「コロサイの信徒への手紙」（59 年頃）からいく

らかを引用する。

神は人を分け隔てなさいません。 / もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。 / 律法の実行に頼る者はだれでも、呪われています。[···]。律法によってはだれも神の御前で義とされないことは、明らかです。なぜなら、「正しい者は信仰によって生きる」からです。律法は、信仰をよりどころとしていません。[···]。キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い^{あがな}出してくださいました。

(ガラ 2・6、2・21、3・10-13)

神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人の神でもないのですか。そうです。異邦人の神でもあります。 / わたしたちは、自分を縛っていた律法に対して死んだ者となり、律法から解放されています。その結果、文字に従う古い生き方ではなく、“霊”に従う新しい生き方で仕えるようになっているのです。

(ロマ 3・29、7・6)

もはや、ギリシャ人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開人、スキタイ人、奴隷、自由な身分の者の区別はありません。

(コロ 3・11)

これらの文書の中にユダヤ教とキリスト教の相違が如実に反映されている。イエス・キリスト信仰は、人間を「律法」の拘束から解き放ち、「イスラエルの神」「主ヤハウェ」を全ての人間に解放し、イエスを「神の子」「メシア」と奉ることで成立した。

16 ユダヤ教とキリスト教——神はともに「ヤハウエ」

ユダヤ教は「神」を天地万物創造の「全能の神」とし、その「神」を「主ヤハウエ」と呼ぶ。既述のように、この「神」の実体はイスラエルの民族神、守護神であるが、これを「全能の神」と性格付けたのは古代人にありがちな誇張、わが神の絶対化である。

福音書はイエスを「神の子」(the Son of God) (マコ 1・1；ルカ 1・35 ナド) と呼び、さらにその「神」を天地万物創造の「全能の神」「主ヤハウエ」という。すなわち、「ルカによる福音書」いわく、イエス・キリストの先祖はアブラハム、ノア、アダムであり、「そして神に至る」と (ルカ 3・23-38)。「マタイによる福音書」でも、イエス・キリストの先祖はアブラハムである、と (マタ 1・1-17)。そのアブラハムはアダムとエバの子孫だから、結論は「神に至る」である (創 5章、11章)。もちろん、この「神」は既述のように、信仰上はいざ知らず、実体は民族神である。

ゆえにユダヤ教とキリスト教の「神」は同一であるが性格は異なる。前者は「イスラエルの神」であるのに対し、後者は全ての人間の神である。加えてキリスト教は「新約聖書」とともにユダヤ教の聖典「旧約聖書」を正典とし、その上で「律法」の掟は事実上無効とする。矛盾した話だが、宗教とは信仰であって、論理的に説明がつくとかつかないとかの話ではない。

17 パウロとペテロ——その後

パウロは異邦人宣教を3回実施したが、第3回目の宣教のあと、56年ごろエルサレムの教会に立ち寄り、異邦人宣教の成果を報告する。イエスの兄弟ヤコブ (小ヤコブ)、長老たち、教会の兄弟たちが皆パウロを称賛するが、同時に懸念と助言も表す。つまり、パウロが異邦人の中にいるユダヤ人に、「子供に割礼を施すな。慣習に従うな」と教えているとの噂が

あり危険、エルサレム神殿で「身を清めてもら」うようにと。

パウロがそうした主旨の宣教をしたことはあり得る。かれの宣教姿勢は「律法」廃棄、イエス・キリスト信仰だから。

パウロは上記兄弟たちの助言に従い神殿で清めを受ける。その行事が終わろうとするとき神殿境内でユダヤ人に逮捕され、殺されそうになる（使 21・17-36）。だが、かれは生来のローマ市民権保持者だったからローマ軍が関与、その監視下で最高法院において大祭司アナニア（アナニ阿斯）らの裁きを受ける。²⁷ 議員たちの議論は紛糾、パウロは生命の危険にさらされ、ローマ軍に救出される（使 23・1-11）。翌朝、ローマ軍はパウロ暗殺の陰謀を尻目に、かれを地中海の港町カイサリア（カイサレイア）へ連行、ユダヤ総督フェリクスに預け、58年ごろまで留置させる。そこへ大祭司アナニアがエルサレムから下ってきてパウロのことを、「世界中のユダヤ人の間に騒動を引き起こしている者、『ナザレ^{じん}人の分派』の首謀者」（使 24・5）と告発。他方、パウロは皇帝への上訴で対抗、60年ローマへ護送される。

パウロがローマに着くと、ユダヤ人からナザレ^{じん}人の「分派」が「至るところで反対」にあっていることで説明を求められ、説得を試みるが賛否それぞれである（使 28・22）。そして2年間、虜囚の身で来訪者に教え、その後スペインか小アジアへ発ち、再びローマへもどる。

64年ローマで大火災発生。ネロ帝（位 54-68）がキリスト教徒に責任を転嫁、パウロは殉教したと信じられている（上智 3、1631 頁ナド）。

ペテロをいえば、42年ごろヘロデ・アグリッパ 1 世の教会迫害で逮捕投獄、鎖につながれたが、何日か後に不可解な方法で救出され、その直後に仲間の所に立ちより、イエスの兄弟ヤコブ（小ヤコブ）にエルサレム教会の実権を託す旨告げて立ちさる。ちなみにアグリッパ 1 世の迫害で、ゼベダイの子にしてヨハネの兄弟ヤコブ（大ヤコブ）が「剣で殺」されてい

る（使 12・1-5、3-17）。

ペテロがいつエルサレムを去ったかは不明だが、使徒会議後の 49 年春、シリア州の首都アンティオキア教会を訪れている。あるとき彼が異邦人と一緒に食事していると、エルサレム教会のヤコブのところからある人々（割礼を受けている人たち）が来たので、恐れて身を引こうとし、パウロから「面と向かって」非難されている（ガラ 2・11-14；旧約、1370 頁）。

18 エルサレムの「神殿」と「教会」

ユダヤはエルサレム神殿下の国家であり、強固な機構で成り立つ。原始キリスト教会は神殿支配下の一組織「ナザレ^{じん}人の分派」である（使 24・5）。「分派」の人たちはエルサレムに住み、神殿に日参、「律法」を順守する。

とはいえエルサレムの教会は 48、49 年ごろの使徒会議で「律法」上の掟は異邦人に事実上破棄しているから、エルサレムの教会員がその結論を自らの言動に現すことはあり得ること。果たして 62 年、イエスの兄弟ヤコブ（小ヤコブ）が「律法」侵害のかどで、アグリッパ 2 世任命の大祭司アナノス 2 世に逮捕され、石打ちの刑で殺される（古代誌 6、291-92）。

上述のように、エルサレム教会は度重なる迫害に晒されながらも自らの意思で分離独立することはない。しかし彼らは、周辺のユダヤ同胞の狂気じみた反ローマ感情を醒めた目で見ていたであろう。ローマと戦っても勝てるわけがないと。66 年のユダヤ戦争勃発直前、かれらの多くはエルサレムを脱出、ヨルダン川東岸のペラへ移転する（旧約、450 頁ナド）。かれらは前 586 年のゼデキア王の轍を踏まなかったのだ。ユダ王国のゼデキア王は、預言者エレミアの預言を無視して新バビロニアと戦い、惨敗、ソロモン王創建の神殿・王宮をふくむエルサレムの廃墟と捕囚（第 2 回）を引き出した。²⁸ ユダヤ人は聖書に精通する民族であり、この悲劇を知らな

いはずがない。そうでありながら、彼らは無謀な戦争へ突入する。「律法」に固執する人たちの宿命である。

ユダヤ人の敗北と勝利

1 敗北

ユダヤ戦争の結果は明白。70年惨敗、死者110万人、奴隷にされた者10万人弱。それでもユダヤは懲りない。紀元後130年、ローマ皇帝ハドリアヌスがエルサレムを視察、ここにユピテル神殿をもつローマ都市の建設を命じる（旧約、31、1222頁ナド）。ユダヤ人はこれに憤激、132年、シメオンという男をメシア預言の成就者に担ぎあげ、ふたたびローマに反乱、135年大敗、死者50万人、国家も失う。²⁹ 2度の大戦を通じて「イスラエルの神」は「わが民」を守護したとはいえない。

ユダヤ人はパレスチナを追われ、1800年間世界を流浪する。その間の第2次世界大戦中600万人が虐殺され、パレスチナへ帰還、1948年イスラエル共和国の独立を宣言する。史実だから恐ろしい。「イスラエルの神」は天地万物創造の全能神でないことは明らか。

2 勝利

キリスト教はローマで執拗残酷な迫害にあいながらも底辺から上層部へ浸透、313年ローマで公認される。

320年ごろローマ七丘の中央、ペテロの殉教地とされるバチカン丘に、皇帝コンスタンティヌス1世の財政支援を受け、カトリックの総本山サン・ピエトロ大聖堂（聖ペテロ大聖堂）創建。392年、キリスト教はローマ固有の神々を駆逐し国教の座を占める。

回顧すれば、ユダヤ人は紀元後135年、ローマ帝国に国家を物理的に消

滅させられたが、257年後に精神的に征服したことになる。勝敗の分かれ目は「律法」固執か廃棄かにあった。前者はユダヤの支配知識層が固めた、後者は「無学な普通の人たち」が開いた。

注記

- 1 典拠、サム下 5・2、19、7・9、23・12；代上 14・10 ナド。
- 2 典拠、申 23・21；レビ 25・36；cf. 申 15・1-3。
- 3 典拠、新共同訳、裏頁 43；荒井、1007 頁ナド。
- 4 典拠、古代誌 4、14-5 頁；新共同訳、一マカ 1・16-2・38；日本、58 頁；旧約、96-7、1119、1360 頁。
- 5 典拠、古代誌 4、266-70 頁。断食日は、神殿破壊とバビロン捕囚後に、それらの出来事を記念して公的なものとして年 4 回、すなわち 4、5、7、10 月に設けられた（荒井、598-99 頁参照）。「断食日」は「贖罪日」で、「何の仕事もしてはならない。」ようだ（参照：レビ 16 章；民 29・7；申 9・18）。レビ 16・29 の「第七の月の十日にはあなたたちは苦行をする。何の仕事もしてはならない。」における「第七の月」（ユダヤ暦）は西暦の 9 月末から 10 月半ばにあたる（参考：<<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A6%E3%83%80%E3%83%A4%E6%9A%A6>>）。「祭儀を肅々と続ける。」についてはエゼ 43・25-27、エズ 6・9 を参照せよ。
- 6 「ユダヤ属州の首都カイサリア」典拠、<<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%82%A4%E3%82%B5%E3%83%AA%E3%82%A2>>
- 7 典拠、古代誌 6、92-108、218-221 頁；戦記 1、293-97 頁。
- 8 典拠、ルカ 13・32；マタ 14・1-12；古代誌 6、50-1 頁；旧約、1252 頁。『古代誌』6 に洗礼者ヨハネに関する記事があるが、この記事の真実性については、イエスについての記事と異なり、多くの学者が承認している（50-1 頁）。
- 9 「ヘロデ・フィリッポス（フィリポ、ピリポ）」は正しくは「ヘロデ・ボエトス」（旧約、1079、1080-81 頁）。
- 10 典拠、古代誌 6、13-21 頁；戦記 1、275-76；ルカ 2・2；使 5・37。
- 11 典拠、日本、802；旧約、871-72、1366 頁；クルマン、12 頁ナド。秦剛平

- 氏によると「ギリシャ語ゼーロータイは、律法に『熱心な者たち』を意味するが[・ ・ ・]、このギリシャ語に『熱心党』などという訳語を与えるのは誤りであろう。」(戦記1、363頁；旧約、871頁；大貫、862頁)。
- 12 「拒否」(ヨハ6・15)、「人々を罪から救う・ ・ ・」(マタ16・21、20・28)。典拠、新共同訳、裏頁41；大貫、1102頁。
 - 13 典拠、マタ26・47-27・44；マコ14・61-2、15・1-32ナド。「ユダヤ人の王」とされた理由は、「メシア」は古くは「王」を意味したからだろう。参照、「イスラエルの王」(マコ15・32ナド)。
『古代誌』6にイエスに関する記事があるが、この記事の真実性については16世紀以降学者間で論争があり、まだ決着を見ていない(34頁)。
 - 14 「昔の人の言い伝え」とは「『律法』を守るための人為的規則」、つまり口伝律法(共同訳、50頁；旧約、412頁)。ファリサイ(パリサイ)派は口伝律法を重視するが、サドカイ派はこれを認めない(古代誌4、205頁；古代誌6、18頁；旧約、951頁)。「断食」は「罪の悔い改めを表わす宗教行為」(共同訳、28頁)。
 - 15 「人間が義とされるとは[・ ・ ・]『救われる』とほとんど同義である」(新共同訳、裏頁24)。
 - 16 ベテロは「シモン」「ケファ」(マタ4・18、16・16-19、ヨハ1・42ナド)、イエスの兄弟ヤコブは「小ヤコブ」、ヨハネの兄は「大ヤコブ」とも呼ばれる。
 - 17 この「教会」がエルサレム原始教会(教団)。英語聖書では次の表現になっている：‘the church’ which was at Jerusalem—Acts 2:47, 5:11, 8:1, etc.
 - 18 典拠、使8・1-2、11・19-20；日本、391、596頁；旧約、450頁。
 - 19 典拠、使10・28、11・1-3；及びヨシュ23・1-7、11-13、エゼ44・7-9参照。使徒言行録に記されたこの掟は「モーセ5書」には見いだせない。だから口伝律法だろう。
 - 20 「まず、福音があらゆる民に宣べ伝えられねばならない。」(マコ13・10)は「編集句である可能性が大きい。」(上智1、516頁)
 - 21 異邦人宣教では洗礼が割礼に代わって入会の儀式として意味を持つ(上智1、515頁、上智2、787頁参照)。
 - 22 パウロはタルソスで生育したから(使21・39、22・3)、彼自身ディアスポ

ラのユダヤ人。長じてエルサレムに上り、高名なラビ、ガマリエル（ファリサイ派の著名な学者ヒレルの孫）のもとで律法の教育を受けたとされるが（使 22・3）、信憑性が疑われている。典拠、<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%91%E3%82%A6%E3%83%AD#cite_note-2>

- 23 典拠、使 10・34-35；つぎも参照、使 10・28、11・18。
- 24 「未割礼」＝「割礼を受けていない」（使 11・3）；「割礼」とは「男子の性器の包皮を切り取ること。古代オリエント諸民族の風習。」（新共同訳、裏頁 22）。
- 25 「使徒言行録では、エルサレム教会の指導者であるペテロが最初に異邦人を回心に導いた者であることが強調される」（上智 1、516 頁）。
- 26 典拠、使 15・6-35、特に 15・20；1 コリ 8・7-13、10・28；レビ 18・6-18；創 9・4-6、レビ 17・10-14。共同訳（使 15・20）参照。
- 27 ローマ市民権保持者（使 16・37、21・39、22・25-29）。
- 28 典拠、エレ 27 章、32 章-52 章；王下 25・1-17；代下 36・10-21。
- 29 「2 次にわたるローマ帝国に対するユダヤ人の反乱はいずれもメシア運動の特徴を有していた。」（大貫、1103 頁）。

主要参考文献

<本稿では下線部の氏名等をもってその著の略語とする>

辞書類

荒井章三 [他編] 『カラー版聖書大事典』新教出版社、1991

泉田昭 [他編] 『新聖書大辞典』いのちのことば社、1985

大貫隆 [他編] 『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002

旧約新約聖書大事典編集委員会編 『旧約新約聖書大事典』教文館、1989

上智学院新カトリック大事典編纂委員会編 『新カトリック大事典』全 4 巻、研究社、1996、1998、2002、2009

長窪専三 [著] 『古典ユダヤ教事典』教文館、2008

日本基督教協議会文書事業部・キリスト教大事典編集委員会 『キリスト教大事典』教文館、1995

馬場嘉市 [編] 『新聖書大辞典』キリスト新聞社、1971

聖書

『聖書 新共同訳 旧約聖書統編つき』日本聖書協会、1996

『聖書 新改訳 注・引証付』日本聖書刊行会、昭和 45

『新約聖書 共同訳・全注』講談社、1994

The Holy Bible containing the Old and New Testaments. London: The British and Foreign Bible Society, n.d.

単行本

オスカー・クルマン『イエスと当時の革命家たち』川村輝典訳、日本基督教出版局、1972

ブルトマン『イエス』川端純四郎・八木誠一共訳、未来社、1963

フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ古代誌』全 6 巻、秦剛平訳、筑摩書房、2000。
山本書店版（1981）も使用した。

フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ戦記』全 3 巻、秦剛平訳、筑摩書房、2002。
山本書店版（1985）も使用した。